

資料をご寄贈くださった方々(敬称略)

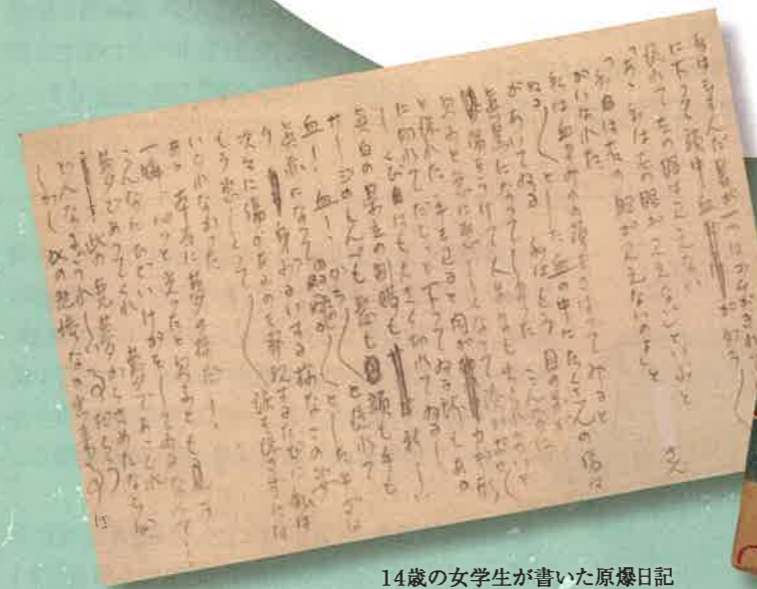
資料名	寄贈者名	資料名	寄贈者名
写真	大久保 イツ子	旅行証明書	立川 裕子
ゲートルの名札	大久保 イツ子	罹災証明書	立川 裕子
腕時計	大久保 イツ子	医証	立川 裕子
絵画	桑原 重信	戦災記録絵はがき	立川 裕子
罹災証明書	桑原 礼子	手記	中川 徳穂
申請書	桑原 礼子	長崎原爆の威力測定に関する資料	長崎放送株式会社
封筒	仙石 節子	絵画	平道 弘子
写真	仙石 節子	手記	前田 繁
手紙	仙石 節子	絵画	松岡 眞
書籍	仙石 節子	絵画	森 洋子
日記	立川 裕子	地図	森 洋子
体内から摘出された破片	立川 裕子	『最新實用辭典』	匿名
徽章	立川 裕子	『ペン字毛筆入現代手紙の文』	匿名
腕章	立川 裕子	音声データ	匿名
手紙	立川 裕子	雑誌	匿名

原爆資料館 収蔵資料展

会期 令和5(2023)年
3月14日(火)～7月3日(月)

場所 長崎原爆資料館 地下2階
企画展示室

企画展示のみの入場は無料です。



14歳の女学生が書いた原爆日記

[施設のご案内]

開館時間 4月、9月～翌3月 8:30～17:30 (入館は17:00まで)
5月～8月 8:30～18:30 (入館は18:00まで)
8月7日～9日 8:30～20:00 (入館は19:30まで)

休館日 12月29日～12月31日(※図書室・ホールは12月29日～1月3日)

駐車場 有料(バス12台、普通車71台)

[交通のご案内]

●路線バス利用:長崎バス・県営バス「浜口町」バス停下車、徒歩約5分
●路面電車利用:「原爆資料館」電停下車、徒歩約5分



長崎原爆資料館

長崎市平野町7番8号
Tel.095-844-3913(長崎市被爆継承課)
【Email】hibaku@city.nagasaki.lg.jp

長崎原爆資料館 検索

長崎原爆資料館
NAGASAKI ATOMIC BOMB MUSEUM

原爆資料館 | 収蔵資料展

原爆資料館では、昭和30(1955)年に前身となる長崎国際文化会館が開館して以来、1000人を超える方々に資料のご寄贈をいただき、常設展示や企画展示、県外での原爆・平和展などで公開してまいりました。

今回は、令和2年度から令和3年度までに新たに長崎原爆資料館へお寄せいただいた資料のうち、初展示となる資料を集めた収蔵資料展を開催いたします。あわせて、それぞれの資料をお持ちだった方の被爆体験を伝えるため、当館で収蔵している関連資料も展示しています。ここではその展示資料の一部をご紹介します。

個人の被爆体験を物語る資料

14歳の女学生が書いた原爆日記



12歳の南里裕子さん



被爆当時、南里裕子さんは県立長崎高等女学校の3年生で14歳。三菱長崎兵器製作所大橋工場で学徒動員中に被爆し、左半身の約100か所にガラス片が刺さりました。

この原爆日記は、休学した半年間に「この出来事を忘れまい」と8月9日から11日朝までの体験を書いたものです。被爆して避難するところから川棚町の救護所で手当てを受けるまでの状況が生々しく綴られています。紙を糸で縫い合わせて表紙をつけた自作のノートは、女学生らしい可愛い装丁です。しかし、日記には大怪我を負って嘆き悲しむ裕子さんの悲痛な思いや多くの被爆者が水や薬を求めて苦しみ叫ぶ「生き地獄」の惨状が綴られています。裕子さんは「戦争を絶対にくり返さないよう、平和な世の中であって欲しい」という思いから、日記を寄贈しました。



被爆当時身に着けていた徽章



南里裕子さんが被爆当時身に着けていた徽章です。血で汚れたため、友人が救護所で洗ってくれましたが、真っ黒に変色してしまいました。自宅用の白い小さな徽章は綺麗な状態のままで残っています。

寄贈：立川裕子

大久保彰さんの名札と腕時計



大久保彰さん



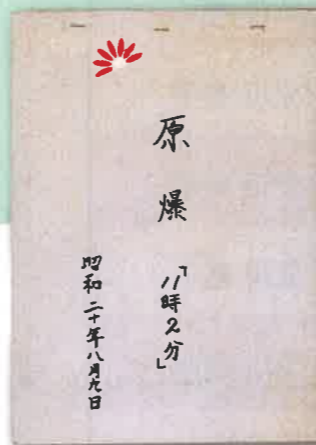
被爆当時、大久保彰さんは16歳。長崎医科大学附属医学専門部の1年生でした。彰さんは、大久保家の長男として大切に育てられ、県立長崎中学校を卒業後、医専に進学しました。手先が器用で、部屋には精巧な模型飛行機が沢山飾られており、休日は早朝からブリキのカゴを持って金毘羅山へ昆虫採集に行くのが趣味でした。

彰さんは被爆後、行方不明になり、翌年1月18日に金毘羅山の高圧線の鉄塔のそばで、変電所の職員により発見されました。遺体は落葉や枯草に半ば埋もれ、ひじを曲げ、つま先を揃え、うつ伏せの姿で骸骨になっていました。遺体の証明してくれたのは、母親のイツ子さんがゲートルの裏に縫い付けていた名札でした。彰さんの遺体は茶毘に付されましたが、遺骨とともに腕時計が残りました。

寄贈：大久保イツ子

被爆体験を語る・綴る・描く

前田繁さんの被爆体験記



前田繁さんは被爆当時、鎮西学院中学校の1年生で13歳。学徒動員により、長崎市東部の甕岩付近で、本土決戦に備えた「戦車断崖」の構築作業に従事していました。午前11時頃、兵隊の「伏せろ!」という大声が聞こえたかと思うと、ものすごい閃光と爆音、爆風が襲い、あたりが真っ暗になりました。その後、繁さんは焼け野原の市内を通り、稲佐町2丁目の自宅を目指します。

この被爆体験記は、「あの日」から50年経った平成7年の8月9日に、原爆投下の瞬間から自宅に帰宅するまでの体験を綴ったものです。便箋でまとめられた体験記には、繋がれたまま焼死した馬の様子やタンに焼け爛れた皮膚がこびりつき助けを求める老夫婦、折り重なった人間の死体など帰宅途中に目撃した「生き地獄」の惨状が記録されています。そして、同級生を失った深い悲しみと悔しさが繰り返し述べられ、このような光景は「二度とない様にしたい」とまとめられています。

寄贈：前田繁

夏・3.5kmの記憶(II)



松岡眞さん

松岡眞さんは被爆当時、県立長崎中学校の3年生で15歳。8月9日は爆心地から約3.5キロの疎開先にいました。午前11時2分、マグネシウムを燃やしたような閃光が走り、天井板が落ちてきました。眞さんは、その中を這うようにして玄関まで逃げ、散乱するガラス片の上を裸足で走り抜け、山を駆け上がりました。ふと空を見上げると、夏の青空には焦げ茶色の柱が突き抜けていました。

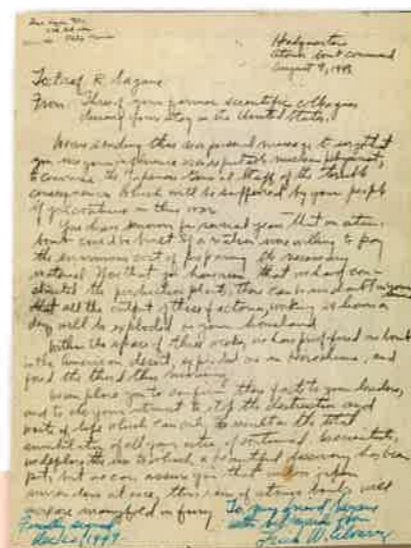
これまで画家として絵を描き続けてきましたが、あの日から70年がたち、「もう先は長くない。鮮明に残るあの日の記憶を残しておきたい。」と筆をとりました。多くの人に見てもらい平和と人の尊厳に思いを馳せてほしいという願いがこめられています。

寄贈：松岡眞



ラジオゾンデ関連資料

嵯峨根遼吉博士あてのサイン入り「原爆手紙」



原子爆弾投下の際、アメリカの物理学者アルバレース博士ら3人から東京帝国大学教授の嵯峨根遼吉に対して「原爆手紙」がラジオゾンデ(原爆の爆圧や威力などを測定する機器)とともに投下されました。

「原爆手紙」は、日本が即時降伏しない場合、他都市への原爆攻撃を実施すると警告するもので、原子核物理学者として核兵器の威力をよく理解する嵯峨根博士に日本の降伏を勧告するよう訴えかける内容となっています。しかし、手紙が嵯峨根博士の手に渡ったのは、昭和20年9月末になってからでした。

その後、嵯峨根博士は昭和24年に渡米し、手紙の差出人である元同僚に再会します。この手紙は、投下された手紙の写しで、昭和24年12月22日にアルバレース博士、翌年の6月3日にモリソン博士がサインを入れたものです。青色のサインが署名部分で、手紙の原本はアルバレース博士が保管しています。

寄贈：仙石節子



手紙の写真版にアルバレース博士の署名を得る